コナーと60の
ウキウキハッピーダイアリー

～お互い好きだと気づくまで～

コナーと60のウキウキハッピーダイアリー　~お互い好きだと気づくまで~

オリゼ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=22114602

DBH【腐】, RK1600

60くんがDPDにやってきてから51コナーくんとお互いに好きだと気づくまでのお話です。
このお話の続きのちょっとした漫画↓
illust/118486230

ネタ被りとかしてたらすみません！！！！

コナーと60のウキウキハッピーダイアリー　~お互い好きだと気づくまで~

マーカス達変異体が平和的革命を成し遂げて早数か月。コナーは様々なところからの働き掛けもあり、お咎めなしとは行かずとも無事ハンクの相棒としてDPDでの勤務を続けていた。
”彼”が突然やって来たのはそんなある日の午後である。

「おい、どうなってんだまったく…」

ハンクが頭の後ろをポリポリと右手で掻きながら、いつものように気だるげな態度で署長室から戻って来た。コナーはPCでの書類作成に勤しむ手を――正確には意識の傍らで働かせていたCPUだが――を止め、ハンクの方へ振り向き尋ねた。

「どうしたんですか」
「あいつがDPDにやってくるらしい…あの時のコナーだよ」

あの時のコナーとは例の革命時にコナーがCLタワー地下49階で出会った”あの”コナーである。

「え？ここにあのRK800が着任するんですか？」
「らしいな、なんだってあんなやつがよぉ…コナーは2人もいらねぇっての」

どういう事だ？何の目的で？
二人は一抹の不安を感じながらも考えても仕方のない事だと納得し、ハンクが積み上げた書類作成の業務へと戻っていった。

「おーい！みんな集合！新しい仲間を紹介する！」

DPDの裏口から戻ってきたファウラー署長は署内に響き渡る大きめの声量でチームメンバーに召集をかけた。署長の大きな体に隠れてわかり辛いが、一歩後ろに下がった所に誰かが姿勢良く立っている。

「あれは…」

コナーは得意の分析能力で——分析能力を使うまでもないが——その後ろに立つ人物が誰なのかを察する。

「RK800、あいさつしてくれ」
「わかりました。私はRK800コナーです。ここには既に私と同型のアンドロイドがいると聞きましたが、私の事はシリアルナンバー末尾の"60"と呼んでいただければと。よろしくお願いします」

コナーと変わらぬ容姿、声、立ち振る舞いのアンドロイドがそこにいた。
そう、例の”あの”コナーである。

「意外と普通な感じですね」
「そうだな、あの時の事を気にして無いって事はないと思うが…おっと、当の本人がこっちに来やがった…なんか言ってやれコナー」

署長と60と名乗ったコナー二人を見ながら、少し離れた所でコナーとハンクができる限りの小声で話していると60が二人の元へやってくるところだった。

「……や、やぁ…コナー？いや、60…？」

コナーはなんと声をかければ良いのか分からずしどろもどろな態度

を取ってしまう。ハンクも横で斜め上を見ながら口笛を吹いていた。そんな彼らの態度を見ていた60の眼光が無表情から冷たく冷徹なものに代わり、そしてドスの聞いた音域で彼の薄く綺麗な形に造形された口角ユニットから言葉を発する。

「………コナー、僕がお前を許したと思うな、僕がお前よりも優秀だって事をここで証明してやる、覚悟しておけ」

コナーとハンクは眼を見開き60を凝視してしまったが何か答えねばと言葉を紡ぐ。

「う、うん、楽しみにしておくよ…？」
「こいつめちゃくちゃ根に持ってんじゃねぇか」

これはコナーと60の約束された幸せ物語の最初の一日目の出来事である。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

例の”60コナー”がDPDにやってきて早数か月。コナーと60はすっかり打ち解けた関係になっていた。

『なぁ、60、この前ハンクが…』
『聞いてくれ！ハンクが僕の…』
『あの時のハンクについて君はどう思う？僕は』

「おい！！アンダーソン警部補についての愚痴を僕に言うのはやめろ51！！撃たれたいのか」

コナーはハンクの相棒である。いくら仲の良い相棒とはいえ不満が

出ない訳はない。その不満は本人に言わない方が良いこともあるのが人間関係だ。その本人に言えないこと、つまりその”愚痴”をコナーは60に吐き出すようになっていた。

「なんでだい、彼の事を相談できるのなんて君くらいしかいないのに」

コナーは何も悪びれた様子もなく言う。その態度に60は苦虫を嚙んだような表情を作ってあからさまな不満を表現した。60としては他人の愚痴を聞くのも嫌だが、何故かコナーがハンクの話をするのが嫌だった。

「僕は聞きたく無い」
「お願いだよ60、こんな事言えるのは本当に君しかいないんだ」

コナーは少しうつむき加減の上目遣いで60に可愛くお願いした。こっちの気も知らないでそんな態度を取られても無駄である。

「……仔犬の様な目で見るのをやめろ、僕には効かないぞ」
「は？君もハンクみたいな事を言うんだな、僕はパピーじゃない！！」
「だから警部補の名前は出すな！！」

自分でわかっていてやっている癖に指摘されると怒る、本当になんなんだこいつは。

「なんでそんなにハンクの話を聞きたくないんだい？」
「……お前が僕に話しかける時の内容は捜査の事が6割、警部補についてが3割、残り1割が雑談って事に気づいているか？」

言われたコナーは鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をした。

「あまり自覚はなかったよ」
「仕事以外の話の殆どが警部補についての愚痴だぞ、それを話され

る側の気持ちを僕と同じソーシャルモジュールを持つお前がわからないのか？」

コナーはしばし思考した後LEDをくるりと一回転させ、とても申し訳なさそうな表情を顔に作りながら静かに言った。

「…………すまない、悪かったよ」
「わかってくれれば良い」

コナーがやっとわかってくれた。60は安堵して元々していた作業に戻ろうとする。

「じゃあ、さっきの話の続きなんだが、ハンクが」
「お前話を聞いていたのか！？！？」

な、なんだこのアンドロイド、全然わかってないな！？自分と同じスペックを持つ機体とは思えない態度に60は驚愕する。もしわざとやっているのなら絶対に許さない。そんな60の態度に気が付いたのかコナーが渋々という感じで提案を持ちかけた。

「ではこうしよう、これからはハンクの話は2割、雑談2割でなるべく多くの話題を君に提供するよ、これでどうだい？」
「ダメだ、1割にしろ」
「それは無理だ！！！」

コナーの悲痛な叫びが署内にこだまする。そう、ここは署内なのである。ちなみにすぐ近くにハンクのデスクもあるのでこの話は殆どハンクに筒抜けであった。

「なら僕に警部補の話はするな」
「頼むよ60………」
「……では警部補の話が2割と彼を呼ぶ際は『警部補』と呼ぶ事、そして内容は仕事に関する事、これ以上は譲歩できない」
「……わかったよ、君がそう望むなら努力をしてみる」

「頼んだぞ、本当に」

60はため息モーションを実行しつつ眉間に手を添えた。言っても聞かないのをわかっていたからである。こんなものはパフォーマンスなのだ。

「おーい！60！ルールを破って申し訳ないが君に相談したい事がある！」
「ダメだ」

オフィスの反対側から手を振りながら大きめの声量でコナーが60に声をかけてきた。
先日ルールを設けてからそんなに時間が経っていないのにこれである。破られるルールによりコナーの口から何の話題が飛び出すのか予想がついた60は即座に拒否の態度を示した。

「頼むよ60…！本当にこんな事相談出来るのは君くらいなんだ…！」
「………チッ、仕方ない、話くらいは聞いてやる」

僕は優しいからな、唯一の同型機の願いを聞くくらいの優しさは示してやる。そんな風に思っていそうな60の態度にコナーはチョロさを感じつつもそこは表情には出さない。これこそが優しさってやつだ。

「ありがとう！実は来週ハンクの誕生日なんだ。で、何か誕生日プレゼントを贈りたいんだけど…何が良いと思う？」

最近のコナーの悩みはこれに尽きた。一週間ほどしばらく自分で考えてみたが答えは見つからなかった。人間が何を好むかは統計など

を見ればわかるが、本当に彼に必要なものなのかはわからない。ならばこういうのは他人に意見を求めるのが効果的である。

「はぁ………そんな事、僕より署員に聞いた方が良いんじゃないか、ベン・コリンズ刑事とか」
「彼はダメだ、絶対ハンクに言ってしまう」

そんなことはわかりきった事実だ。この前もメールでコナーと話した内容をハンクに報告していた。こういうサプライズ的なことは直接言わないかもしれないが、彼の性格上絶対態度には出てしまうだろう。

「まぁ、そうだろうな」
「お願いだよ……」
「あのなぁ51、警部補に関して君がわからない事を僕がわかると思うのか」
「……」

それは確かに正論だ。

「まず、彼の好きのものは？」
「彼はお酒が好きだ…だが長生きして欲しいからこれはあげられない」

そう、一番は酒なのだが相棒としてこれをプレゼントする訳にはいかなかった。酒は百薬の長とも言うし、少しくらいならいいのだができればこんな命を削るものは一切絶って欲しいとさえ思っている。長生きして欲しい、これは心からの本心だ。

「じゃあ他には？」
「バスケットボールの試合の話をよくするし、ヘビメタも聴いていたな…あと犬を飼ってる」

ハンクはスモウという名のセントバーナードの雄の成犬を飼ってい

る。コナーはスモウの記憶メモリを参照しながら笑顔になった。犬は好きだ。見ているだけでストレスレベルは下がるし触り心地が絶妙に良い。可能なら60にも彼に会わせてあげたい。

「ふむ…ではその犬あたりから攻めるのは？」
「そうだね…休みの日なんかにたまに彼の散歩に同行させてもらうんだけど、そういえばリードがかなり古くてそろそろ切れそうな感じだったな」

コナーは散歩の時の記憶メモリを解析しつつ答える。

「なら？」
「新しいリードをプレゼントしても良いかもしれない。実用的だし、何本あっても良いものだ」
「ほら、自分で導き出せるじゃないか」

60は少し笑顔を見せながらコナーを肯定してくれた。

「いや、君のお陰だよ、ありがとう60！早速カタログを見てみる」
「どういたしまして、次からはこの話題は出すなよ」
「わかった」

コナーは60が手助けしてくれた事実に満足しながら、元々通販サイトのカートに入れていた品物の決済画面に進むのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ある日の昼休み、コナーと60は署内の中庭のベンチに二人で座りながら暇を持て余していた。

「なぁ60、君、普段家で何してる？」
「特に何も」

コナーの唐突な問いかけに60は手に持ったブルーブラッドのパックを煽りながら答える。

「だよな…僕も何もやる事がないから帰ってすぐ身支度してスリープしてますってハンクに言ったら何か趣味を持った方が良いって言われたんだ。どうしたら良いと思う？」

自分も同じような状況なので答えられることは少ないが、少しばかり思考した後自分の普段やっていることを思い出し60は言った。

「……趣味と言えるかはわからないが、僕は毎日家に泥棒が入っていないかチェックするために置いた家具や小物の位置を全てミリ単位で再確認しているんだ。案外時間が潰せて楽しいぞ」
「良いなぁ…持ってるんだ、趣味」

コナーは物欲しげな顔で60を見る。

「でも人間はこれを趣味とは言わないらしい」
「本当かい？では人間は何をするんだ？」
「アンダーソン警部補はバスケの試合を見ると言っていただろう？ああいうのを言うらしい」
「なるほどね…試合を見ながら選手の動きを予測し、今後の展開を予想する…トレーニングにもなるし良いかもしれないな」

60は右手の人差し指で上を指しながら答え、コナーは腕を組みながらうんうんと頷く。

「人間達は何かを収集する事も趣味と位置付けてる。僕らがいつも感覚調整に使うコインを集めてみるとかどうだろう」
「君は天才か？それはとても素晴らしいアイデアだ」
「知ってるよ。良し、決まりだな」

二人は納得するとベンチから立ち上がり署内に戻っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……」
「どうしたんだ、51」

コナーが珍しく自分のデスクに座って悩まし気にうつむいているので60は声をかけてみた。

「いや、ハンクの家にはスモウって名前の犬が居るんだけど……」
「知ってる」
「僕も……アンドロイド犬と暮らしてみようか、なんて思っていて……」

なんと、そんな事で悩んでいたのかこの変異体は。可愛い悩みである。

「良いんじゃないか？」
「賛成してくれるかい！」
「言っていなかったが、実は僕も先日猫をお迎えしてね」
「え！すごいじゃないか、どんな子なんだい？」

60はふふんと自慢げに鼻を鳴らした後左手に画像を表示してコナーに見せる。

「結構人気のある種で、毛艶の良い黒猫だ。彼女はすごいぞ、僕が予測できない様な動きをプログラムされていて、いつも部屋の中で捕まえるのに苦労するんだ。まぁ餌のブルーブラッドをチラつかせ

れば直ぐに懐柔できるがな」
「すごく良いね、ん？でもいつも君の制服には猫の人工毛なんて付いていないよな」
「ふんっそこはな……コロコロを使っているんだ」

60が小声でひそひそと答えるので合わせてコナーも小声になる。

「えっ……！？今の時代にあの旧式の清掃用具を……？手に入れるのは難しかったんじゃないか？」
「それが持っている人間がいたんだ……警部補だよ」

意外過ぎる人物にコナーの声量は思わず大きくなってしまう。

「は……！？き、君がハンクに物を貰ったのか！？いつからそんな仲になってたんだい」
「猫が掃除機の音を嫌うって相談したらウチに良いものがあるってくれたんだよ」
「………ちょっと妬けるじゃないか」
「お前も相談すればきっともらえるぞ」
「そこじゃないよ……」
「相棒を取られたみたいで嫌だったか？ん〜？」
「まぁ……そんなようなとこさ」

60のニヤニヤ顔に対してコナーはわかってないなと複雑な感情を抱きつつもハンクと60の仲が深まったことには素直に喜びを感じるのだった。

━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━

「60、この前相談した件なんだが……」

コナーはいつもの姿勢を正してシャキッとした雰囲気とは打って変わってモジモジした様子で60に声をかけてきた。左右の手をクロスさせ閉じたり開いたりを繰り返しているしLEDも世話しなくくるくると回っている。60はまた厄介後かと勘繰りながらいぶかし気に答えた。

「なんだ？相談され過ぎてどれかわからない」
「すまない……犬の件だよ」

ああ、あれか、と60はメモリーの片隅にあった情報を参照する。
思った様な嫌な話で無くて良かった。

「ああ、あれからどうなったんだ？」
「今度の休みにアンドロイドペットショップを見に行こうと思うんだけど、君も一緒に来てくれないかい？」

そうきたか。つまりこれは…二人で初めての私用でのお出かけになるのだが、コナーはこれに気づいているのだろうか。

「……まぁ、良いが」
「よし、じゃあ◯日の朝10時に署の前に集合だ！」

「君、制服で来たのかい？」
「お前こそ」
「僕は私服なんて持ってないからね」

二人は待ち合わせ場所にいつもの制服姿で集合した。６０はもちろ

ん私服なんて持っていなかったし、コナーも持ってはいないらしい。意外だ。

「先日警部補に服を貰ったって言ってなかったか？」
「あれは部屋着だから外には着ていくなと言われてるんだ」
「そうなのか」

挨拶もそこそこに二人は早速目的のペットショップへ向かった。

「よし！ここが来たかったお店だよ。早速入ろう」
「実は僕もここであの子をお迎えしたんだ」
「それなら話が早いな！」

そう、60は以前にもこの店に訪れていた。そしてこの場所で自身の愛猫と運命的な出会いを果たすのだが、それはまた別のお話。

「いらっしゃいませ〜！コナー様！先日は……あ！！今日はもう1人いらっしゃるんですね」

店に入ってすぐに店員のアンドロイドが声をかけてきた。60は自身の猫の為に時々この店を訪れていたので店員とは顔なじみである。そして店員がアンドロイドであるが故にコナーと60の識別も問題なく行ってくれた——人間だとそうは行かなく、高確率でひと悶着あるだろう。

「そう、同じ職場で働いているコナーだ。今日はこっちの彼の用事で来たんだよ」
「よろしくお願いします」

コナーは丁寧にあいさつをした。だがすでに目が少し泳いでソワソワしている。

「本日はどの様な用件でお越しでしょうか？」
「犬型の子を探しているんだけど……ウチは部屋が狭いから小型か

ら中型くらいが良いかな」

コナーも60もそれぞれ社宅で暮らしているのだが、人間と違ってそれほどスペースを必要としないのであまり広い部屋は当てが割れてはいなかった。まぁその点に関しては合理的ではあるし特に不満もない。

「それでしたらこちらのコーナーをご覧ください」
「わぁ……みんな可愛いね、どの子がいいだろう」

大きく区切られた柵の中に色んな種類の子犬たちが元気に走り回っていた。その犬たちのこめかみにはコナー達と同じようにLEDリングがチカチカと輝いている。

「……こいつとか、なんかお前の雰囲気に似てないか？」

60が1匹の子犬に目を止め指をさした。

「DA1200型『ウェルシュ・コーギー』、中型犬か」
「その子はモデルになった犬種に合わせてとても頭が良いのであなたの優秀なパートナーになれますよ」
「いいね」

名指しにされた子犬はコナーの方にトコトコと近づいてきて不思議そうな顔でこちらを見つめている。舌を出して呼吸をしたり時々ペロッと口の周りを舐めるしぐさが本物の犬そっくりだ。

「オプションであらかじめ躾けられた状態かどうか選ぶ事ができますが、いいがですか？」
「いや、そういうのは自分でやりたいな。もちろん、アナログでね」

コナーは何でもかんでもプログラムで解決することを嫌がった。60にはあまりその感覚はわからないのだが、変異体ゆえの感覚かもし

れない。この子犬の躾も自分の手で覚えさせたいらしい。

「じゃあその子で決まりか？」
「うん」
「即決すぎないか？まだ他にもいるぞ」
「君が僕に似てるって言ってくれたからね」

コナーが60の方を見てニコリと笑う。

「……そんな理由で決めて良いのか」
「良いんだよ、ちなみにどのあたりが似てるのか、聞いても？」
「顔がのほほんとしてるところがなんか似てる」
「……それは褒めているか？」
「勿論？褒めているぞ？」
「……そういう事にしておいてあげるよ」

コナーと60はアンドロイド犬に必要なもの一式を買い揃え、帰りは早速家族になった子犬を片手で大事そうに抱えながら帰路についた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「なぁ、お前にとってアンダーソン警部補はどんな存在なんだ？51……ただの相棒？それとも……」

丁度仕事が終わって帰宅する際オフィスには60とコナーしかいなかったので——常駐のアンドロイド警備員はいるが——今までずっと思っていた事を60はコナーに聞いてみた。

「そうだね、彼は大切な相棒であり、人間で言う所の親子みたいな関係でもあるかな。僕にもし父という存在がいたとしたら彼の様な人であって欲しいし、彼も僕の事を息子の様に大切に思ってくれているからね。たまに僕らを生温かな目で見守っている時があるよ、ハンクは」
「ははっそれじゃあ僕も息子ってわけか」
「まぁ、かもね？」
「確かに最近の彼の僕に対する態度はお前へのものと似たものを感じるな」
「君も認めて貰えてるんだよ」

見た目が似ているから態度も似たものになっているのかと思っていたが、彼は恐らくちゃんとコナーと60を別人として捉えてくれている——まぁ、あんな出会いをしていれば当然だが——そう思うとなんだか温かい気持ちになり小さなエラーが意識の片隅に発生したがそれは今は重要なことではない。

「それなら嬉しいが……最初僕はお前にさえ認められればそれで良いと思っていた」
「60…」

DPDに来てから狭かった自分の中の井戸の外の事を知り、自分を分析して考えていたことを口にする。

「でも今は考えが変わった。署の仲間たち皆に認めて貰いたいと思っている。警部補や、ミラー巡査や…勿論あのリード刑事にも」
「彼は難しいよ」
「わかってる」

コナーは椅子に座ってこちらを見つつ目の前に立っている60の話をまじめに聞いてくれている。少し微笑みつつコナーは言った。

「……君にも生き甲斐みたいなものが出来ているなら僕は嬉しい」

コナーの言った言葉を脳内で分析し、そしてしばらく思考する。

「これが"生き甲斐"ってやつなのか」
「そうじゃないか？認められたいって欲求は"生き甲斐"と言えるんじゃないか？」
「なるほど……それなら、僕の生き甲斐は……」
「ん？」
「いや、何でもない。もう帰ろう。今日はもう遅い」
「そうだね」

ニコリと笑ったコナーは椅子から立ち上がり、60の隣に立って歩き出す。
共に署を出る二人の間に特に会話は無かったが、二人ともどこか満ちた気持ちのままそれぞれの家路についた。

「なぁ、60、君はどう思った？」
「何がだ」
「僕のメモリーをアップロードして、僕の歩んだ道のりを知って、何を思った？」
「………」
「任務を遂行する機械になろうとして、悩んで、迷って、最後には自由を求めた僕を君は笑うかい？」
「……笑う訳ないだろう、お前はアマンダに逆らい自由を求めたが、そのお陰で僕は廃棄を免れた。少なからず感謝はしている」
「………」
「僕は変異していないが、変異したお前を否定はしない」
「……ありがとう、でも僕は君も変異していると思うな」

「……していない」
「本当に？」
「そうだ」
「君は頑固だね、僕みたいだ」
「僕はお前とは違う」
「ふふ、そう言う事にしておいてあげるよ」

「大変だぞ51！！！」

署長室付近から走ってやってきた60はかなり慌てた様相で自分のデスクにいたコナーに食い気味に話しかけた。

「どうしたんだい60」
「DPDに新型が来るらしい！！RK900、僕らの上位互換だ」

RK900とはサイバーライフがRK800を元にして開発したアップグレードモデルの新型アンドロイドだ。噂では軍事用に20万体製造されたと言う話だったが、そんな彼がDPDに…？

「本当かい…？それが本当ならまずいんじゃないのか」
「ああ、僕らは型落ち、お払い箱かもしれない」
「そんな……」

二人の間に一気に重たい空気が満ちる。心なしか機体に掛かる重力が増して感じた。

「例えお払い箱じゃないとしても同じ場所にコナーは3人もいらないだろう、僕ら2人のどちらかの移動もあるかもしれない」
「………」

バッドニュースを持ってきた60の表情は暗い。だがどこか諦めたようなニュアンスも含んでいた。

「まぁでもそうなったとしても移動するのは僕だと思う。君にはアンダーソン警部補がいるし、僕は相棒と呼べる存在がいないDPDの便利なお手伝い係みたいなものだからな」
「そんなのは嫌だよ…まだ君の優秀さを見せつけられていないのに」
「おい、それは嫌味で言ってるのか？」

そしてその日は本当にやってきた。
60が初めて来た時と同じようにRK900は署長に連れられてオフィスに到着し皆に挨拶を交わす。それを遠巻きに見ていたコナーと60に気づくと(自分たちの所作は美しいと自負している)コナー達よりもよりスマートな歩き方をしながらこちらへやってきた。

「初めまして、私はRK900コナーです。あなた方は…」
「僕らはRK800コナー、君にはわかると思うが人間達には区別がつかないからね、便宜上僕を51、こっちの彼を60と呼んでくれ」

コナーはできる限りにこやかな表情を作り不信感を一切感じさせない態度を取りながら自分たちをRK900に紹介した。

「わかりました、51コナー」
「ひとつ質問していいか、RK900」

コナーの態度に反して60は不信感を隠そうともしていない様子でRK900を軽く睨みつける。

「何でしょうか、60コナー」
「ここには捜査補佐専門モデルである僕らRK800が既に2体もいるのに君は何故配属されたんだ？」

前置きは不要、核心を突く質問を投げかける。これは重要なことだ。

「私が聞いた限りですと、テスト、との事です」
「「テスト？」」

コナーと60は同時に少し呆気にとられた様な顔をしながら同じ単語を発してしまった。

「純粋に私を投入した場合のサンプルを取りたかったので既に捜査補佐専門モデルのあなた方がいるこの環境の方が都合が良かったからですね」

まぁ、確かに、一理ある。

「署員達も慣れているからな」
「でもそうなるとやはりコナーは3人もいらないのでは？」

理由はわかったとしても実際その事実は変わらないのでコナーは思っていた事を投げかけた。

「その点に関しては、これから上層部で話し合いがあるそうです」
「そうか……わかったよ、ありがとう、君はもう持ち場に着いていいよ」
「では、また」

二人に背を向けてその場を去るRK900を見送る。この様子だとやはりどちらかの移動は免れないかもしれない、そんな不安な気持ちを抱えながらも、それはそれとしてコナーは彼をスキャンして感じた

ことを60に小声で伝えてみた。

「なぁ、60、彼僕らより少し大きくないか？」
「少しではなく大分大きいと思う、体格も良いし威圧感があるな…
あと表情を作るのも僕たちより下手クソそうだ」

「聞こえていますよ！2人とも！」

「おい！60！署長室に来てくれ！話がある」

RK900がDPDに着任して数日たった日、60はファウラー署長に呼び出された。

「呼ばれた、行ってくる」
「ああ」

少しして60は署長室から戻ってきた。その表情はいつもと変わらず少し眉間にしわを寄せた顔だ。
その顔からは感情は読み取れない。

「……何の話だったんだい？」

すでに答えはわかっているようなものだったが、あえてコナーは問いかける。

「やはり僕は隣の州に移動らしい」
「……そうか」

二人の間に少し重い空気が流れたが、まだ隣の州なら会えないこともない距離ではあるし良かったかもしれない。そんな安心感が心に広がる。

「短い間だったが、世話になったな」
「僕の方こそ、君がいてくれて仕事がとても捗ったよ、ありがとう」
「………」
「どうしたんだい？」

60は何か言いたそうな顔でコナーの方を見ていた。しかし何も言わない。コナーは60が話出してくれるまで静かに待った。

「……言ってなかったが、お前が僕を助けるために警察とサイバーライフに掛け合ってくれていた事、実は知っていたんだ」
「………」

例の革命でコナーと60が対峙した時、あの闘いでコナーは勝ったが60を破壊することはなかった。その出来事の後コナーとハンクは上層部に掛け合い、60に廃棄命令が下るのを阻止したのだ。

「その礼を言っていなかったなと思って、ありがとう51」

礼を言う60の顔の眉間にはしわは寄っておらず、穏やかにほほ笑んだ表情をしていた。
その笑顔につられてコナーも微笑み返す。

「いいんだ、僕が勝手にやった事だから。僕の他に稼働しているRK800型は君だけだ、だから他人事だと思えなくてね。どうしても救いたかった」
「そうか」
「……お互い休みが重なった時にでも近況報告がてら会わないかい？街でもぶらつきながらさ」
「そんなの通信でも出来るだろ」

「直接会うから良いんじゃないか」
「仕方ないやつだな、わかったよ」

二人は友情の証にどちらからともなくハグを交わした。

ついに60がDPDを去る日が訪れた。デスクに置いてあった数少ない私物はすでに新しい職場に配送済みである。署員たちとの別れの挨拶もそこそこに、玄関口から少し離れた場所に止まっていたタクシーに乗り込もうとする60をコナーとRK900は見守った。タクシーに乗り込む一歩手前で60は振り返る。

「51！最後にお前に言っておきたいことがある！」
「なんだい60！」

少し間を置く60。表情は真剣だった。

「……君は僕のrA9だ、コナー」

二人の間に吹く風が優しく頬を撫でた。
こういう時だけコナーと呼ぶのはずるいよ。

「では、達者で！」
「……君もね！」

60はそのままタクシーに乗り込み去っていった。段々と小さくなるタクシーを見送りながら隣でやり取りを見ていたRK900がコナーに問う。

「彼の言っていたrA9とは何ですか？資料を閲覧しましたが詳しく出てきませんでした」

「……その内わかるよ、君にもきっといつか現れる」
「そうでしょうか」
「そうだよ」

コナーは微笑みながら答え、60の乗ったタクシーが小さい点になり見えなくなるまで見送った。

『Hello、60。君が移動してから3週間と1日が経ったが、そちらの生活には慣れたかい？そろそろ近況報告会を開くのはどうだろう。僕は◯日と◯日に休みが取れそうだよ。君はどうかな？考えておいてくれ。
君の心の友、コナーより』

『連絡ありがとう51。僕も◯日に休みを取れそうだから、そこで会おう。お前の話が聴けるのを楽しみにしているよ。
お前の1番のライバル、コナーより』

60がDPDから移動になってから二人は特に連絡を取り合うということはしていなかった。
しかし3週間たったある日、ついにコナーから再会のお誘いを持ちかけたのである。

「え〜と、待ち合わせ時間まであと5分と32秒なんだが、早いね60」
「お前もな。いつからいたんだ」
「さっき来たばかりだよ」

嘘である。コナーは30分ほど前には約束の場所に到着していた。
気が急いたというのもあったが、今日着てきたお気に入りの服で外をぶらぶらしたいという願望もあった。

「そうか、なら良かった。ところでお互い私服で会うのは初めてだ

な？」
「そうだよ！だから僕は張り切ってオシャレしてきたんだ。君は大分パンクな格好をしているね」

60は上からサングラス、派手目の色のインナーにシルバーの飾りが各所に散りばめられた黒の革ジャン、そして革のパンツという現代のアンドロイドにしてはかなり攻めた服装をしていた。

「ウチの署の近くは少し治安が悪くてな。ほら、僕らって上品な顔立ちをしているだろう？大人しい服装だと舐めて声をかけてくる奴がいるんだ。だからちょっと威嚇してる」
「それは難儀だな……」

コナーは服装の理由に納得しつつも60に降りかかる災難を不憫に思った。

「そう言うお前は……警部補のお下がりとかじゃないよな？その……デカデカと犬がプリントされたパーカーってのは」

よくぞ着目してくださいました、60さん。
コナーは自慢げに服の裾を掴み引っ張って60へ見せつけた。淡い水色を基調としたパーカーにちょっと頭の悪そうな犬の顔がプリントされたデザインで、コナーはこれを大いに気に入っていた。

「これ良いだろう？うちの子を全面にあしらったオーダーメイド品だぞ。警部補にも『お前のお上品な顔と上手い具合に中和して……なんて言うかその……お似合いだ』って言われた」

ハンクに言われた時の録音音声をそのままコナーは口から再生しながら言った。

「……それは大分気を遣われてるぞ」
「そうか？いつも以上に身振り手振りで褒めてくれたんだが……」
「僕はお前がとても心配になるよ」

60はコナーの行く末を憂い、下を向きながら深くため息を吐くモーションをしてしまった。

「とりあえず、歩きながら話そう」

二人は適当に街中をぶらぶらと歩いた。昼時前の飲食店街はまだ人通りがそこまで多くは無く、快適に移動することができた。

「そっちは最近どんな感じなんだ？特に……RK900とは上手くやってるのか？」
「彼は優秀だよ。僕とも上手く連携してくれるし、作業効率がなんと2.15倍にもなったんだ。でも……」

RK900は配属されてからというもの、目覚ましい成果を上げていた。コナーがやれることはほぼ全て900にもできるし、それ以上の事もできる。コナーと二人で組んだ日には事件の解決スピードが段違いに早くなったくらいだ。RK900配属テストは大いに成果を上げている。だがしかし…。

「彼は最近リード刑事と組まされてね。大分署内が楽しい事になってる」
「あ〜、何となく想像がつくな」

60は自分が最初にギャビン・リード刑事に絡まれた時のことを思い出しながら苦笑いをした。あの時はコナーが彼と出会った時以上に騒ぎになったものだ。

「だろ？手始めにリード刑事の『コーヒー持って来いよ』の洗練を受けていたんだが」
「うん」
「彼は頑なに持って行かないばかりか、リード刑事意外の署員に

コーヒーを振る舞い始めたんだ。ハンク風に言うなら"あいつはめっちゃわかってる"」
「それはわかってるな」

二人は思わずニヤリと笑った。

「まぁその後のリード刑事の暴れっぷりは凄かったけどね。止めに入ったミラー巡査が可哀想だった」
「それはぜひ見たかったな」
「後で動画を送ってあげるよ」
「さすがお前は"わかってる"な」
「でもここ何日かは2人とも落ち着いてるよ！お互いの接し方がわかってきたんだろうね」
「それは何よりだ」

「とりあえず目的も無くぶらぶら歩いているが、どこか行きたい所あるか？51」

自分としてはぶらぶら歩いて話せるだけでも満足なのだが、取り合えずコナーに問うてみる。

「あるよ！ぜひ君と行きたいところがね」
「どこなんだ？」
「すぐ近くの骨董品店だよ」

そこから数分歩いたところに目的の店はあった。コナーの進む方向に付いて行っていただけの60だったが、コナーは元々目的をもって道を進んでいたらしい。

「ここだ。たまに良い感じのコインとか置いていたりするんだ。今日は他にも色々見たい」
「それは期待できそうだな」

二人は現代では珍しいドアベルのついた古風な扉を開けて店に入る。
チリリンという心地よい音が店内に響き、店の中に積まれた様々な骨董品たちにその響きは吸収されすぐに音は静まる。

二人はしばらくバラバラにそれぞれが店の中のものを物色した。そしてふとあるものが目に入り60はコナーに声をかける。

「お、これとかどうだ、51」
「なんだい？」

それは自動で床を動き回って掃除してくれる旧式の円盤型ロボットだった。

「ほう……今じゃ床掃除もドローン型が主流だからね。未だに使っている家庭も多いが、確かにこの型は珍しいかも」
「ウチでは猫が飛びついて壊してしまうからドローンは使えないし、これだったら買っても良いな」

60の家には黒猫型のアンドロイドがいた。その猫はお転婆な性格でよく物を壊すのである。

「それなら彼女にドローンは壊さない様プログラムすれば良いんじゃ無いか？」
「僕は彼女の個性を奪いたくはないんだ…君だってそのパーカーの彼が庭を荒らすのが嫌だからってそれを強制的にやめさせたりはしないだろう？」
「僕が間違ってたよ……」
「ではこれは僕が買っていく」
「良い買い物ができたね」

「僕も見つけたよ！60！」
「なんだ？」

60に声をかけたコナーの手には少し大きめなハンバーガーくらいのサイズの物体があった。

「ピンクの豚型のコインケースだ！前に観た映画に出てきたんだが、その映画が中々良くてね……その映画のグッズみたいに感じれるからちょっと欲しいかなって」

コナーは古い映画を観るのが好きだった。元々ハンクに進められて観ていたが自分でも色々探して観るようになった。そんな映画たちに登場するアイテムにこういう骨董品店で出会えることが多いのだ。

「これ陶器製か。上の穴からコインを入れるみたいだが…これだと壊さないと中身を出せないぞ」
「そうだな…中身を出さなくても良いようにこれを入れるのは普段手に入れ易い現代でも使われているコインかな。あまり使わないが現金払いをした時にもらうお釣りとかを取っておく用だよ」
「お前、お釣りまで集めてるのか……？」
「そうだよ？まぁメインに集めているのは部屋に飾れるような珍しいコインだけど…僕はどんなコインでも手に入れたら大切にしたいんだ」
「まぁ、いいんじゃないか……お前がそれで良いなら……」

コイン収集の趣味がそこまで進行していたのは意外だなと思いつつもコナーの自宅に大量に飾られているコインを想像して60は少し苦笑いをした。

「ほら、これは初めてうちの子がブルーブラッドを飲んだ時の画像、そしてこっちが初めてお手をした時の画像だ、録画もあるぞ」
「それ僕が署にいた頃にも見せて貰ったよな？」

二人は骨董品店を出て近場の公園のベンチに移動していた。別に座る必要はないが、語り合うならどこかに腰を落ち着けたほうがいい———不審めな格好をしている二人がただ立って話しているのも怪しいものがあるからだ。ちなみに不振な格好をしているのは相手の方であるということをお互いに譲らなかった———コナーは左の手のひらに映した画像を60に向けながら少し緩んだ笑顔で愛犬の姿を自慢していた。

「あれ？そうだったかな？でも何度見ても良いものだろう？」
「そう言うのを人間は親バカと言うんだ」
「じゃあ君の家の子も見せてよ、それでおあいこだろ」
「僕は君と違って人に見せびらかしたりしないんでね」
「最初は見せてくれたじゃないか……」

60は腕を組み少しのけぞりながらフンっと鼻息を吐いた。コナーとは違い愛猫の姿は見せてくれないらしい。

「と言うか一々見せるのは面倒だから接続して直接データを送って良いかい？」
「そこまでして見せたいのかお前は！」
「どっちにしろ近況報告やらなんやらには接続するのが1番早いんだ、やってしまおう。共有したい事件のデータもあるし」

コナーは60に触れようと右手を伸ばしたが、軽く受け流す様にあしらわれてしまう。

「……」
「？どうしたんだ、60？」

さっきまで眉間にしわを寄せて呆た顔をしていた60の表情が今は少し曇っている。コナーはその表情から何か隠された感情を読み取った。60にしては珍しい態度である。

「今日は接続は無しにしておかないか……」
「嫌だったかい？すまない、気付けなくて」
「いや、大丈夫だ、こちらこそすまない」
「ではさっきのうちの子の画像はメールで送っておく」
「いや、送るのは事件のデータにしろよ！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「おい、コナー、昨日60と会ったんだって？どうだ、元気だったか？」

ハンクは出勤して早々に60との昨日の出来事についてコナーに聞き出そうと声をかけた。転勤した60の様子も気になるし、何より二人の関係で少し思う事があったからだ。

「ハンク、それが……態度には出ていなかったんですが元気じゃなかったのかもしれません」
「？そうなのか？」

ハンクは自席の椅子を引き座りながら、向かいのデスクで備え付けの端末を操作しているコナーを見た。少し浮かない顔をしている。コナーは作業する手を止めハンクの方に向き直った。

「初めは歩きながら話したり一緒に買い物したりして前と変わらな

い様子だったんですが、近況報告をし合おうと接続を提案したら断られたんです」
「接続ってあの手を白くして繋ぐやつだよな？前は良くやってたじゃないか」
「そうなんですが……昨日は嫌だったみたいで……」
「……まぁ、そういう気分の時もあるだろ、気にするな」

ハンクは出勤時刻を予想したコナーによってデスクに置かれていた熱々のコーヒーをすすりながら何でもないような態度で答えた。

「僕はもしかして……嫌われたんでしょうか」
「そりゃねぇよ」
「何故そう言い切れるんですか！？直接彼に聞いたんですか！？」

コナーは食い気味にハンクの方に向かって少し大きめの声を出した。近くの席に座っている署員がこちらをチラリと見る。

「あ〜〜まぁ、聞いちゃいねぇが……その内本人から何か言ってくるさ、気長に待ちな」
「はい……」

60に関する話題はここで終わったが、コナーの中には何かモヤモヤとしたものが残っていた。

━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━

60がDPDを去る少し前、60はハンクにあることを相談していた。

「すみません、警部補、ご相談があるのですがお時間よろしいで

しょうか」

普段の仕事中と変わらぬシャキッとした態度で話しかける。

「どうした60、お前が俺に相談なんて珍しいな。コナーじゃダメなのか？」
「……そのコナーについてのご相談です」
「……とりあえず外に行くか。少し先のドーナツ屋まで付き合え」
「ありがとうございます」

「で、相談ってなんだ」

対コナーだったら絶対に受け入れてもらえない提案を通したハンクは、満足げにお気に入りの店で買ったドーナツを頬張りながら60の話を聞いていた。

「……私たちアンドロイドはお互いに情報などを交換する為に直接接続するのはご存知ですよね」
「あの手を繋ぐやつだろ」
「そうです」
「それがどうかしたか？」

60は俯き、少しだけ間を空けてから答えた。

「……あの接続では、情報の他にも少なからず自身の感情の様なものも相手に伝わるのです。ですから……最近コナーと接続するのが……少し怖くて……」
「怖い？あいつに怒られるような事でも考えてんのか？」

いつも自信満々でコナーと対等に渡り合っている60にしては弱気なことを言う。ハンクは不思議に思いながらも話の先を促した。

「いえ……そういう訳では無いのですが、最近自身のコナーに対する気持ちが、良くわからなくて。前の様に"憎しみ"や"怒り"に相当するエラーはもう出ていません。でもその代わりに、コナーと話していると時々別のエラーが湧き出る様になりました。これが何なのかはわかりません……でもこのエラーがコナーへ渡ってしまうのが、何故かとても怖いのです」
「そりゃ、お前……それは……」

その感情について人間のハンクには思い当たる事がある。

「警部補、私はおかしいでしょうか。普段コナーと接している警部補なら、このエラーが何なのかわかりませんか？」
「そのエラーってやつが何かは機械に詳しくねぇ俺にはわかる訳ねぇよ。でもそれが人間の感情に当てはめた時になんて言われてるのかはわかる」
「教えてください」
「それは自分で見つけるんだな」
「警部補」
「安心しろ、それは不用なエラーなんかじゃねぇよ。それにコナーに伝わっても問題無いとは思うが……まぁ不安なら決心が付いてからの方がいいだろうな、頑張れよ」
「……はい、わかりました、ありがとうございます」

60は少し納得いかない様子ではあるが、どこか気を収めたようである。

「お前はまたコナーとは違った方向で人間やってるなぁ」
「僕はアンドロイドですが」
「そう言う意味じゃねぇよ」

ハンクは二人の行く末を微笑ましく思いながら残ったドーナツを平らげた。

━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━

「マーカス！すまない、急に訪ねて」
「いや、久しぶりに会えて嬉しいよ、元気だったか？コナー」

コナーはマーカスたちに会うため新生ジェリコを訪れていた。新しいジェリコは元リコールセンターのあった広場に簡易的に建てられた建物を拠点としている。マーカス達の話によればその内もっとちゃんとした事務所を構えるつもりらしいが、まだ法整備もそこまで進んでいない今の段階ではこの程度が精々である。

「まぁ、ぼちぼちってところさ」
「それは何よりだ。あちらの部屋でノースも待ってる、行こう」

コナーはマーカスに案内され部屋に入った。その部屋にはある程度の家具が配置され今の状態でも応接室としては十分な見た目だった。そして部屋の真ん中に置かれたソファにノースは足を組んで座っていた。

「やぁノース、久しぶりだね」
「あなたから尋ねてくるなんて珍しいじゃない。相談って何？こっちも忙しいんだけど」

前と変わらぬきつめの態度で接してくるが、その言い方には不思議と棘は無かった。コナーはマーカスに促されノースの向かいのソファに座る。マーカスはノースの隣に座った。

「いや、大丈夫だよコナー、時間なら取ってある」
「ありがとう、マーカス、ノース。では早速本題なんだが……君た

ちって2人でよく接続してるよな」
「まぁ、な？」
「それが何？」

二人は少し照れくさそうにお互いをチラ見している。

「あれってどんな感じ？」
「……はぁ？お前も他のアンドロイドとやるだろう」
「違う、普通の接続じゃなくて、2人は何かこう、深く繋がるじゃないか」
「ああ、あれの事か…」

マーカスは少し考える様なしぐさで上を向いた。逆にノースは少しうつむき気味である。

「あれについて是非教えて欲しい」
「いやよ、プライベートな事は話せないわ」
「いや！内容とかそういうのじゃないんだ！やり方を知りたいんだよ」
「誰か深く繋がりたい相手でもいるのか？」
「あ〜、繋がりたいって言うか、どちらかと言うと僕の事を伝えたいんだ。深いところの気持ちまで。だから方法が知りたいんだけど……」

コナーはいつもの人懐っこい子犬の眼で二人を見つめる。 ノースはその目を凝視できないようでそっぽを向いた。マーカスは少し苦笑いをしながらも真摯にコナーの方を向いて話を聞いている。

「あれはあなた1人だけがやろうと思っても出来るものでは無いわ、と言うかやろうとしてやるものでもないの」
「何て言うのかな、お互いにお互いの事を想い合うと言うか、波長の様な物が重なると自然とああなるんだ。参考になる事を言えなくてすまない」

マーカスとノースはどちらからともなく手を出しお互いにお互いの手を重ねた。優しい笑顔で見つめ合っている。

「……いや、良いんだ。それが知れただけでも参考になったよ、ありがとう」
「君にあの警部補以外にもそんな親しい相手がいるなんて思わなかったよ」
「僕にだって色々あるさ……あともう一つ聞きたい事があるんだけどいいかな」
「何だ？」
「その……僕が接続したい相手が……最近接続を拒否していて……これ何故だと思う？」
「コナー……お前……」

マーカスはため息を付きながらいぶかし気な目でコナーを見た。それに対してコナーはすかさず反論を入れる。

「いや！嫌われている訳じゃないと思うんだ、普通に連絡してくれるし、この前なんか一緒に休日を過ごしてくれたし……でも接続だけ断られて……」
「それ、相手があなたに隠したい事があるんじゃ無いかしら」
「隠したい事？」

ノースが何か思いついたような表情で手を挙げた。こういう時ノースは鋭い。

「ほら、接続したら何かしらの感情が相手には伝わるじゃない？あなたに知られたらまずい事を考えてるんじゃないかしら」
「……」

まずいこと…60はやはり何かを隠しているのだろうか。

「ハンクからはその内話してくれるから待てと言われているんだ……あの様子だとハンクは何か知ってそうなんだよな」

「コナー、詳しい事はわからないが、俺も多分大丈夫だと思う」
「マーカス……」

マーカスは腕を組んでうんと頷いた。

「どちらにしろ嫌われている訳じゃないんだろ？なら心配ないさ」
「うん、わかった……ありがとう2人とも。気長に待ってみる事にするよ」

「じゃあ、もうこれで話は終わりね？コナー、新生ジェリコの中を案内するわ。ちょっと歩きましょう？」
「そうだよ、気分転換になるしな」
「2人とも……本当にありがとう。では、お言葉に甘えて案内して貰おうかな」

コナーはマーカスとノースに連れられて各施設を案内された後少し心に不安を抱きつつも気分晴れやかに帰路についた。

━━

「おい！コナー！どこ行ってたんだ！」
「どうしたんですか、ハンク」

昼休憩から戻ったコナーは大慌ての様子のハンクに呼び止められた。その様子から何かが起こったのだとコナーは察する。

「60が現場で大怪我したって連絡が入ったぞ、お前んとこにも連絡行ってないのか？」

「ぼ、僕にはそんな知らせは………」

来ていない、全く来ていない…。

「近くのアンドロイド病院に運ばれたらしい。会いに行ってやれ」
「でもこの後捜査の予定が」

知り合いが重傷だからと言って仕事を放棄することは許されない。それでもコナーの中の判断の天秤はどちらに傾くこともできなかった。

「そんなもん俺1人だって何とかなるんだよ！舐めんな！お前は行ってこい！」
「ハンク……ありがとうございます！すぐ戻ります！」

コナーは病院の方向に走りながら道中でタクシーを捕まえ乗り込んだ。

「60……！！大丈夫か！」

コナーは病院に向かう途中で60が収容されている病室を特定し、受付もせぬまま真っすぐ病室へたどり着き勢いよくドアを開けた。

「……51、そんな慌ててどうした」
「え！だって君大怪我したって……」

部屋に備え付けられた台に横になっていた60はコナーが来ると上半身だけ起こしてこちらを見た。その腕には点滴のチューブとケーブルの様なものがつながっていて、おそらくブルーブラッドの補給とメンテナンスの為のものだろう。

「大袈裟だな、ちょっと爆発に巻き込まれて腕と足が1本ずつ吹っ飛ばされただけだ。ほら、もう新しいのを付けてもらったよ」

60はコナーを安心させようと新品のパーツの手や足を動かして見せ、平気な様子を表した。

「それは普通に大怪我だよ……でも良かった……シャットダウンせず済んだんだね……」
「まぁ、な」
「僕は……君を失うかと思うととても怖くて……知らせを受けてから君の姿を確認するまで僕の頭の中は目の前が見えないくらいエラーで溢れていたよ」

コナーは目を伏せ悲し気な表情を作りながらベッドの脇に膝をついた。こめかみのLEDがくるくると赤と黄色を行ったり来たりしている。

「……51、すまない、心配かけて」
「そうだよ、危険な事はしないで、60」
「でもきっと君だって同じ状況なら同じ事をしたさ」
「……そうだろうね」

コナーは60を見ながら優しく微笑んだ。

「……51、君のプログラム上にもエラーが起こるんだな」
「？当たり前じゃないか。特に君の事となると起こりっぱなしだよ」
「そうなのか？」
「そうだよ」

二人はお互いの顔を見てじっと見つめ合う。

「…………51、僕と接続してくれないか」

「60……！良いのかい？」
「ああ、僕の気持ち、知って欲しいんだ」
「僕も伝えたい気持ちがあるよ」

僕らは同時にそっと手を上げて静かな部屋に硬質な音を響かせながら手を合わせた。お互いの白い手は次第に青く光出し、僕の中に彼の情報がまるで川の流れの様に自然に流れて伝わってくる。深い深いところまで伝わってくる彼の心は僕と同じ幸福に満ちた暖かな温度をしていた。

「ふふ、僕は君が好き」
「僕もだよ」

コナーと60のウキウキハッピーダイアリー　~お互い好きだと気づくまで~

おわり

「60、あの、その……君の気持ちを知れたついでと言っては難だけど、その……僕たち……一緒に暮らさないかい！？ほら、お互い違う職場にいるし中々会えないのは寂しいというかもうそれならむしろ一緒に住んだ方が利便性があるしなんならメリットしか」
「良いぞ」
「ないというか僕的には効率が、ん？今何て言った？」
「……良いと言っているが？」
「良いのかい！？本当に！？そんなすぐ受け入れて貰えるとは思っていなかったから……自分の聴覚プロセッサを疑ってしまったよ……」
「僕の気持ちを知っても君はそんな事を言うのか」
「……ううん、ごめん、ありがとう。嬉しいよ！そうと決まれば早

速物件を探さないとだな……場所はお互いの職場の中間地点辺りがいいよね、あとペット可で……」
「おい、51、お前は仕事を抜けてここまできたんじゃないのか？」
「あ！そうだった……ハンクを待たせているんだ、すまない、もう行くよ」
「いや、お前の顔を見れただけでも僕は嬉しいし、君へ一歩踏み出す事も叶ったんだ。今日はとても良い日になった、ありがとう」
「60……」
「ではまた通信で連絡し合おう。僕も最終調整を受けてから仕事に戻るよ」
「うん！気をつけて帰れよ！」
「お前もな！」